

地域との互惠関係構築を目指した学校づくり
～地域連携を基盤とする自己有用感を高める教育の実践～

兵庫県立淡路高等学校
校長 宮地 博己

I はじめに

本校は淡路島の北西部に位置し、21年前の阪神・淡路大震災の震源地から最も近い高校である。平成20年に完成した新校舎からは、瀬戸内海が一望でき、恵まれた自然環境の中にある。

淡路農業高校を前身とし、19年前に全日制総合学科に改編、「ふるさとを愛し、ふるさとに生きる」人材の育成を目標に取り組んでいる。現在は、兵庫県下の公立高校で唯一調理師免許が取得できる「調理」、農業や食品加工を主体とした「花と緑と海のめぐみ」、地域福祉とスポーツの2コースを有する「ライブサポート」、基礎学力の定着を重点に置いた「まなび探究」の4つの系列があり、系列での様々な体験的な学習とキャリア教育を柱として生きる力の育成に努めている。

II 研究の概要

1 自己有用感について

社会性の基礎となる「自己有用感」とは、自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識することであり、「人の役に立った」「人に喜んでもらえた」等、他者の存在が不可欠である。一般に、異年齢との交流体験等を通して、他者を好意的に受けとめたり、社会とのつながりを感じたりする経験を積み重ねていくことこそが自己有用感の獲得に最も有効な方法であるとされている。

本校において、過去の学校生活や学習において否定的な自己概念を抱き、その概念のために前に進めなくなっている生徒は少なくない。自己有用感を高めることこそが、安易に問題行動等に走ることを抑制し、自分に対する「自信」を深め、自己実現のための一歩を踏み出す力になると考えている。

2 学校と地域の関係について

前身である農業高校時代には、本校で収穫した野菜、や牛乳、卵だけでなく、パンなどの加工品の販売を通して、地域と密接な関係にあった。また、本校のある

淡路市富島地域は、平成7年に発生した阪神・淡路大震災で甚大な被害を受け、震災当時は本校が災害復興のための自衛隊の活動拠点となっていた。学校から北に約2kmの地点には、震災当時の断層を保存した北淡震災記念公園があり、「防災・減災教育」は現在も本校教育の柱の一つになっている。

本校における現行の地域と連携した活動は、こういった長年にわたる「学校と地域との関係」の上に成り立っている。

3 具体的な取り組み

(1) 防災・減災活動

平成11年度から学校設定科目「防災と心のケア」を開講し、地震をはじめとする自然災害と災害への備えや対応を学んでいる。阪神・淡路大震災による地域被害の状況を学ぶだけでなく、実際に地域を歩いて危険箇所や避難場所を確認したり、地域住民から聞き取りを行ったりしながら、ハザードマップ「命をつなぐとしまっぷ」を作成した。この「としまっぷ」を富島地区全戸に配布し、地域全体の防災・減災への関心を高める役割を果たしている。



また、北淡震災記念公園において「語り部」活動を行っている方からの講義を受け、修学旅行等で震災記念公園を訪れた小・中学生等に対し、自らが「語り部」となって自然災害の恐ろしさや日ごろの備えの大切さについて伝えている。震災から21年目、「語り部」活動を行ってきた方々の高齢化が進んでおり、震災から得られた教訓をいかに次世代に引き継いでいくかは地

域の大きな課題でもある。生徒が現在行っている活動は、地域にとっても大きな意義を持つものと思われる。



昨年度は、地域にある小学校の防災学習の講師として招かれ、出前授業を行った。テーマごとに分かれたワークショップを終えた生徒たちは「防災の授業で学んだ知識を子どもたちに伝えることができた」「興味を持って自分たちの話を聞いてくれたことが大変うれしかった」等、達成感を得られたと思われる感想がほとんどであった。

高齢化の進む地域において、実際の災害時における高校生マンパワーの必要性は言うまでもない。このような取組みを通して、学校が地域の防災拠点としての役割を果たしていくとともに、高校生が防災や減災への関心を高めたり、自分たちが地域にできることを考えたりする事が高校生にとっても地域にとっても重要である。



(2) 「淡高サロン」の企画・実施

淡路市富島地区の高齢化率は現在約40%、地域全体の人口が減少している一方で、世帯数は増加傾向にあり、高齢者のみの単独世帯が増加しているものと予測される。

ライフサポート系列地域福祉コースの系列授業「社会福祉実習」「基礎介護」の授業において、淡路市社会福祉協議会の協力をいただき、本校生がゼロから企画・運営する「淡高サロン」を年間2回実施している。

この「淡高サロン」は当初「淡高ミニデイサービス」

という名称であったが、「レクリエーションやお食事を通して、もっと気軽に高校生と一緒に時間を楽しんでもらいたい」という強い願いから、現在の名称に変更された。



サロンの企画前に、社会福祉協議会の方から教えていただいた地域の高齢者の現状や、これまで「淡高サロン」に参加された方の感想をベースに、「どのような企画をすれば喜んでいただけるのか」「どんな案内をすればサロンに来ていただけるのか」など、生徒自身がミーティングを重ねながら考えてをまとめていく。最終案が出来上がった段階で、社会福祉協議会の方と打ち合わせを行い、招待状を持って地域の高齢者の方を一軒ずつ訪問、当日の準備、運営まで全てを生徒が行う。



この「淡高サロン」の取組みを軸とし、年間を通じて介護実習やコミュニケーション演習を取り入れながら「地域で共にいけること(共生)」、「人は人に支えられていること(人の温かさ)」などを、生徒は体験を通じて学んでいく。

福祉を学ぶ高校生が、地域の現状を把握し「高齢者の生活圏を広げよう」「楽しい時間を共有しよう」と考え企画・運営を続けることと同時に、地域の高齢者にとって「淡高サロン」が年間行事の一つとなり、開催を心待ちにしてくださるまでになってきている。

地域福祉コースで学び、卒業後福祉系の大学や専門学校へ進学したり、福祉関連施設で働いたりする生徒

が多いのはうれしいことだが、それ以上に卒業生が地域の福祉施設で自信を持ってサービスを提供している、という声を聞かせていただき、「淡高サロン」実施の必要性を実感している。小さな体験の積み重ねが、生徒の自己有用感を高めるとともに、地域福祉に貢献できる人材の育成につながっている。

【実施を終えた生徒の感想より】

リハーサルでイメージしていたように行動したり話したりできないこともあったけれど、何とか自分たちの力で対応することができたと思います。参加された方の「いつも楽しみにしています」「すごく楽しかったよ」の一言がとても嬉しく思ったのと同時に、やはり私たち自身が楽しんでやるのが大切だという事に気づかされました。

(3)「花と緑と海のめぐみ系列」における取組み

前身である農業高校からの流れを引き継ぐこの系列では、花や野菜の栽培に加え、伝統のイチゴジャムやビスケットなどの加工品の製造を行っている。最近では、栽培したトマトを使った新商品「トマトのめぐみラスク」の開発を通して、地域の特産品を活かした商品作りや地産地消について考えさせ、将来の地域農業



を担う人材育成を目指している。

製造した商品はどれも人気が高く、特にイチゴジャム

については地域住民や淡路島を離れた卒業生らから予約注文が殺到し、地域の名産品として定着している。また、新商品のラスクは、北淡震災記念公園などの近隣観光施設で販売していただいております、これらのことは商品を製造するめぐみ系列の生徒たちのやる気につながっている。

また、栽培した花や野菜については、「めぐみ市」と題して6月と10月ごろに学校の校門付近で商品を販売するイベントを開催している。市が始まる前から行列ができるほど人気があり、「自分達が育てた野菜や花を買いに来てくれてうれしい。次はもっと喜んでもらえるものを作っていきたい」と生徒たちは感想を残している。商品の販売を通して、買ってくださる方

と直接触れ合って会話することで、異年齢との交流が自然に深まっていくことに加え、社会とのつながりを感じる貴重な経験の場が、生徒の自己有用感獲得につながっているものと確信している。



(4) 食育教育

①具一1グランプリ

平成23年、「調理系列のある淡路高校の生徒にたくさん参加してもらいたい」と、淡路市商工観光課より企画途中のイベントの相談があった。古くより御食国（みけつくに）と呼ばれる食材の宝庫である淡路島、その数ある食材の中から、おむすびに最もあう具材のアイデアを競い合おうと企画された「淡路市具一（ぐーわん）グランプリ」は、今年で第6回目を迎える。

当初は「調理系列の生徒が中心となってアイデアを出してみてもいい」という考えもあったが、生徒全体に地域の食材の素晴らしさについて知ってもらいたいという気持ちと、生徒の食育教育の推進につながるという観点から、積極的に学校全体で取り組んでいくこととなった。



現在では、調理部、家庭クラブの役員、花と緑と海のめぐみ系列の食品加工の生徒だけでなく、

1年次家庭総合の夏休みの課題として定着している。これまでの大会において、グランプリをはじめ多くの賞をいただいた。昨年度は、1年次の女子生徒が考案した「ちりめんたいマヨおにぎり」が大手コンビニエンスストアの賞を受賞、近畿の各店舗で販売され、好評を得た。

②青少年ふれあい料理教室

本校の家庭クラブの取り組みの一環として、淡路市

子ども会連絡協議会北淡支部と連携し、「青少年ふれあい料理教室」を企画している。地域の小学生に参加を呼び掛け、夏休みと冬休みの年2回、本校に小学生を招いて、料理作りを通じての交流イベントを行っている。

この料理教室では、家庭クラブの役員らが中心となって、メニューの考案から、当日の運営、料理の講師も務める。小さなイベントであるが、自分達で最後までやり遂げたという成就感を味わうとともに、参加した小学生やその保護者から「楽しかった、また来ます」「子どもの長期休業中のいい思い出になった。ありがとう」などと直接感謝の言葉をかけていただけることが、何よりも生徒の自己有用感の形成につながっている。



Ⅲ 成果と課題

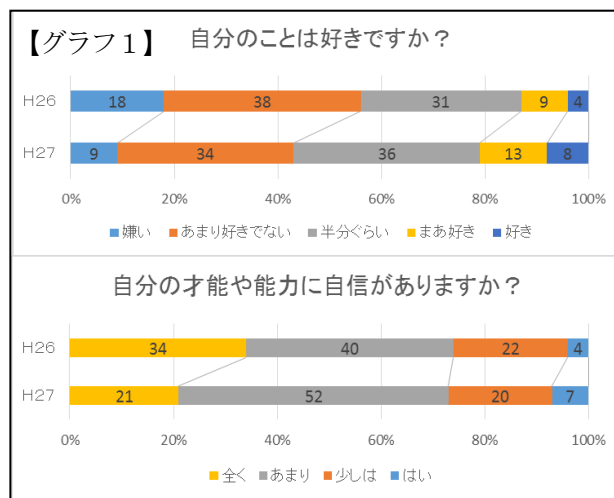
Ⅱ-3で紹介した取り組みは、本校の教育活動の一部であり、これ以外にも授業や特別活動、家庭クラブ・農業クラブや生徒会等の活動の中で、地域の幼児・児童、高齢者、障がいのある方等との交流機会は多い。

地域交流の様子は、新聞記事として取り上げられることも多く、家庭や地域において生徒の活動を知っていただく機会であるとともに、生徒が褒められ、励まされる評価の機会にもなっている。

| 【表1】 | H22年度 | | H27年度 | |
|------|-------|--------|-------|--------|
| | そう思う | まあそう思う | そう思う | まあそう思う |
| 生徒 | 23% | 48% | 34% | 49% |
| 保護者 | 43% | 42% | 54% | 40% |

年度末に実施している生徒アンケートによると「淡路高校に入学して（させて）良かった」と回答している生徒の割合は【表1】のように増加しており、また保護者アンケートにおいても、強く肯定する割合が増加していることが読み取れる。さらに「自分のことを

好き」「自分の能力や才能に自信がある」と回答した生徒の割合は【グラフ1】のような推移を示しており、まだまだ十分とは言えないが、生徒の内面に自己を肯定する気持ちや自己有用感が少しずつ芽生えてきていることがうかがえる。



平成22年度、本校を退学した生徒は13名いたが、平成27年度は退学者0、不登校者数も0となった。

Ⅵ おわりに

地域連携や交流の実践において、相互の関係を維持させていくためには、地域の状況を十分理解した上で、地域に根差したもの、かつ、学校の特色を生かしたものにすることが重要である。紹介させていただいた防災、少子高齢化、農業の継承等は地域の課題そのものであるとともに、総合学科の教育の特徴である「実践的で体験的な学習」を重視した取組となっているために継続できているものと推測される。

生徒の自己有用感育成という点においては、まだ十分とは言えず、これからも農業高校時代からの不易流行の精神を大切にしながら、新たな活動を模索していく必要がある。また、日常の授業においても「ほめる、励ます、認める」等の肯定的な評価が繰り返されるように、アクティブ・ラーニング型の授業実践の拡大に努めているところである。

最後に、学校の様々な活動を支えていただいている地域の方々に深く感謝申し上げたい。

【参考文献】

- ・北島貞一「自己有用感—生きる力の核—」，田研出版，1995
- ・文部科学省国立教育政策研究所 生徒指導リーフ Leaf.18 「『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？」，2015